第二二回 広々とした空間と充実した資料がもたらす『幸せな勉強時間』

柳　学洙

筆者がアジ研図書館を初めて訪問したのはもう八年ほど前になる。修士課程に入ったばかりのころ、「アジ研というくらいなのだから朝鮮関係の資料が充実しているだろう」と思ってアジ研図書館を訪れたのだが、館内に一歩足を踏み入れた途端、その開放的な空間と、予想をはるかに超える資料の充実ぶりに圧倒されてしまった。以来、アジ研図書館は私の最も好きな図書館のひとつであり続けている。今回、幸運にもアジ研図書館について語る機会をいただけたので、筆者なりにこの図書館の魅力と活用法をご紹介したい。

アジ研図書館の数ある魅力のうちで最も大きいもののひとつは、全館の所蔵資料がほぼ全て開架されているということだろう。これだけ膨大な資料をオープンアクセスにしている図書館は国内にもそう無いと思う。専門資料の調査経験がある方ならお分かりだろうが、閉架資料の閲覧申請は意外に手間と時間がかかる。検索して興味をもった資料へと真っ直ぐ自分の足で歩いていける。これがアジ研図書館での調べ物が楽しい大きな理由のひとつである。

オープンなのは資料へのアクセスだけではない。一階から四階までスコンと吹き抜けになった空間デザインは、図書館という言葉につきまとう既存のイメージを覆すような開放感にあふれている。館内に設置された学習机も広々としていて、電源に無線ＬＡＮまで利用が可能とくれば、これはもう一日入り浸って勉強しても全く苦ではない。

アジ研図書館の魅力はもちろん設備面だけにはとどまらない。図書館の本質的な価値である資料の充実ぶりも大変に素晴らしい。とはいえ、図書館が所蔵する膨大な資料の全てを評価するのは到底無理な話であるから、ここでは筆者の専門分野である朝鮮民主主義人民共和国（以下、北朝鮮）の公式文献について紹介したい。

アジ研図書館に所蔵されている北朝鮮の公式文献は、その分量もさることながら、事典・年鑑・全集の類が網羅されているという点が特色である。国家の最高指導者である金日成の著作集を揃えている図書館はそれなりにあるし、「朝鮮中央年鑑」や「朝鮮大百科事典」が揃った大学図書館を探すのもそれ程難しくはない。だが、これらの資料に加え、「百科全書」や「光明百科事典」、一九七〇年代と八〇年代にそれぞれ刊行された「経済辞典」、朝鮮半島の通史を古代から現代に至るまでまとめた「朝鮮全史」まで揃った図書館を国内で他に探すのは困難である。しかも朝鮮の自然地理や行政区画、産業について膨大な情報を網羅した「朝鮮地理全書」まで揃っているときては、これはもう群を抜いているとしか形容のしようがない。

少し専門的な話になるが、北朝鮮で使用されている政治用語や経済用語は、その意味が国家の公式見解として厳密に定められている場合が多い。よって、それらの用語を正確な文脈に基づいて用いるために、同国で発行されている事典や全集で確認する必要がしばしば生じる。しかも同じ用語であっても、時代を経るごとに意味内容が微妙に変わってくる場合もあり、できれば各年代ごとの事典や全集が揃っているのが望ましい。それらの確認を行なう手間が一度で省けるのだから、一北朝鮮研究者にとってアジ研図書館がいかにありがたいかはいうまでもない。しかも事典や年鑑の類に限らず、北朝鮮建国当時の貴重な古い資料や、「労働新聞」、「勤労者」などの公式文献、政治・経済関係の膨大な出版物など、アジ研図書館は北朝鮮関係の広範な文献を収集している。北朝鮮関係の資料をこれ以上に収集している機関は、筆者の知る限りでは他に韓国の北韓資料センターくらいしかない。アジ研図書館の職員の方々、そしてアジ研の北朝鮮研究者が長年にわたって収集の努力を続けてきたからこそ、現在の集積があるのだと思う。

筆者の専門分野の関係上、北朝鮮関係資料の紹介に限ったが、アジ研図書館の資料の充実ぶりは、本連載の他の回でも十分に語られている。開放的でモダンな空間と充実した資料によってもたらされる至福ともいえる勉強の時間、それこそがアジ研図書館が持つオンリー・ワンの価値ではないかと思う。

（りゅう　はっす／アジア経済研究所　リサーチ・アソシエイト）